

I はじめに

生活科は、次のような今日的な教育課題への対応として新設されたものである。

- 子供の生活から体得の場と機会が著しく減少した実態に基づく体験の重視
- 個性豊かな人間の育成
- 学校と家庭、学校と地域との関係の見直し
- 教師中心の授業の変革

したがって、生活科は子供の生活そのものを学習対象とし、生活（体験）を通して生活をより充実・改善するためのものの見方・考え方を学ぶことが重要になる。そして、生活の中にある論理、生活の中にある体系を追究し、「子供の問題解決の力を育成し、創造性の芽を育てること」を目指している。そのためには、何よりも子供が主体的であることが要求され、共通研究主題にある「学ぼうとする力を育てる」ことは、まさに生活科のねらいと一致している。

すなわち、主体的なかかわりを大切にし、自分のもてる力を十分に発揮して学習対象に積極的に働きかけ、自ら学び取る学習を重視していくことである。その過程で、自ら考え、判断したり表現したりする活動を通して、一人一人の思いや願いがかなえられると充実感や達成感が高まり、自己実現に役立つ学習となるのである。

生活科が全面実施され2年が経過した。しかし、各学校の生活科の指導の実態や悩みを調査していくと、その趣旨は理解されているものの、具体的な指導法については必ずしも根付いてきているとはいえない。

以上のような授業の構築を考えると、生活科においては、特に、次のようなことが実施上の諸問題としてあげられる。

- 子供の関心・意欲が高まり、多様な活動ができるための素材や場の設定はどのようにしたらよいか。
- 子供の学習意欲が持続していくために、教師はどんな視点で、どのような支援をしていけばよいか。
- 評価においては、その子供なりの意欲や気付き、活動の様子などの見取りが難しいとされるが、教師はどのような視点で子供を累積的にみていくことが必要なのか。

そこで、「活動する喜びをあげ、自ら問いかけ、解決する力を育てるための生活科指導」はどうあるべきかということについて、環境構成の在り方、子供が自ら進んで活動できる支援の在り方、支援に生かす評価の在り方の三つの視点から研究を進めることにした。

II 研究のねらい

活動する喜びをあげ、自ら問いかけ、解決する力を育てるための生活科の指導はどうあるべきかを実践的に明らかにする。

上記の課題を追究するために、特に、次のことを研究の視点として進める。

- 子供の豊かな活動を促す環境構成の在り方
- 子供が活動意欲を持続し、自ら進んで活動できる教師の支援の在り方
- 意欲や気付き、活動の様子を累積的にとらえて支援に生かす評価の在り方